

お蔭様で公益社団法人国立市シルバー人材センターは



設立40周年 を迎えました



シルバーはうす 105 前にて撮影 左から武川事務局長、三浦友和さん、河津会長

国立市シルバー人材センターは、お蔭様で令和元年12月に設立40周年の節目の年を迎えることができました。振り返れば、地域社会に開かれた団体として高齢者の働く機会の確保と福祉の増進と活力ある社会づくりを目的に、昭和54年に高齢者事業団として設立されました。その後シルバー人材センターは一般社団法人、平成23年には公益社団法人シルバー人材センターとして様相を新たに今日に至っております。

当センターの現状は会員数530名（令和2年4月現在）、令和元年度の契約金額は2億7千万円を超えました。人生百年時代、急速に進む高齢化により、当センターの会員の平均年齢も75歳となり、80歳以上の会員は110名以上となっています。自らの体力に応じた働き方を工夫することが喫緊の課題となつてきています。一方、市民か

らの要望は高齢者の日常生活の支援、子育て支援、環境整備など多くまた多岐にわたつてきています。会員の健康と、安全作業を第一として、働くこと（ボランティアを含む）を通じて生きがいを感じられる活動を目指しています。

40周年を契機に市や各種団体が催すイベントに積極的に参加協力し当センターの知名度を上げ魅力ある働く場として当センターをアピールします。また他地域のセンターとの連携を視野にいたった取り組みも行い、シルバー世代が現役世代を支える重要な役割を担っているという気概を持つて活動したいと思っています。

しかしながら今は新型コロナウイルスによる感染予防が最も重要です。感染リスクを避けた自粛と同時にフレイル予防をし、自らの体力を維持した日常を送りましょう。そしてまた自由に会い語らえる日を待ちましよう。



設立40周年を迎えて

公益社団法人 国立市

シルバー人材センター会長

河津 征二

〈発行〉

公益社団法人

国立市シルバー人材センター

〒186-0003

国立市富士見台 2-38 くにたち福祉会館内

TEL 042-577-0919/FAX 042-575-7288

URL: <https://webc.sjc.ne.jp/kunitachi/index>

e-mail: kunitachi@sjc.ne.jp



【制作・印刷】 ㈱白樺工芸 国立市中3-6-26-105 TEL 042-572-0052 e-mail: shirakaba_kougei@yahoo.co.jp



国立市長 永見 理夫

公益社団法人国立市シルバー人材センターが設立40周年を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。

昭和54年12月に、地域の働く意欲のある健康な高齢者の相互協力を基礎とした、現在の国立市シルバー人材センターの前身である国立市高齢者事業団が発足しました。40年を経過した現在、500名を超える会員の皆様が活躍する団体へ発展されております。

高齢者の豊かな経験と能力を活かしたサービスの提供により、地域社会の福祉の向上と活性化をはじめ、高齢者の健康で生きがいのある生活の実現に大きく貢献されています。歴代会長や役員、会員、並びに事務局の皆様におかれましては、平素より、国立市のさまざまな公共サービスにご

支援・ご協力を賜り、また、このコロナ禍におきましても、家事援助サービスをはじめ、さまざまな仕事を継続して引き受けただいておりますこと、衷心より感謝申し上げます。

人生100年時代と言われる中、働く意欲と能力がある高齢者が、社会の一員として貢献できる喜びや生きがいをもつて活躍していただけるよう、今後とも、国立市シルバー人材センターの活動を支援してまいります。

結びにあたり、公益社団法人国立市シルバー人材センターの益々のご発展と、会員の皆様のご健勝とご活躍を心からご祈念申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。

国立市シルバー人材センター 設立 40 周年を祝して



国立市議会議長 石井 伸之

公益社団法人国立市シルバー人材センターが設立40周年を迎えられましたこと、心からお慶び申し上げます。

昭和54年の設立以来、経験豊かな年長者が活躍する場の確保に向けて、河津会長を先頭にご尽力されていることに、心から敬意と感謝の意を表したいと思います。

また、会員各位を裏方としてサポートされている武川事務局長を始めとする事務局職員が「微に入り細に入り」の丁寧かつ適切な対応に向けて努力されていることに、感謝申し上げます。

これからも、会員各位の声をしっかりと受け止め、誰もが気持ち良く働くことの出来る環境の充実に向けて、どう

ぞよろしく願います。人生100年時代の到来が直前に迫る中、貴センター会員の皆様が活躍される場を縦横無尽に広げることが求められています。

そのためにも、会員各位が長年の人生経験で培われた、高い能力と豊富な実績を如何無く発揮できる場所を、あらゆる方面で探索することが望まれます。

年長者が元気に生き生きと働く、活力のある健康長寿社会の実現に向けて、貴センターが益々発展されることを心より祈念申し上げます。設立40周年に寄せるお祝いの言葉とさせていただきます。

設立 40 周年記念



三浦友和さん特別対談



国立市シルバー人材センターは、お蔭様で設立 40 周年を迎えました。このたび対談していただいた俳優の三浦友和さんは、ご結婚 40 周年。国立市にお住まいで、市民の皆様におなじみの三浦さんに「40 周年つながり」で記念誌の紙面を飾っていただこうと、国立市のことをはじめ、様々なお話を伺いました。



河津征二会長プロフィール 1941 年生まれ、山口県出身。民間会社退職後、中国上海大学に 5 か月語学留学し、帰国後、語学ボランティアとして活動。2007 年から 1 年間、中国山西大学で日本語教師。2011 年シルバー人材センターに入会。広報委員、福祉サービス委員を歴任。2013 年理事、2015 年副会長を経て 2017 年会長就任、現在に至る。

三浦友和さんプロフィール 1952 年 山梨県生まれ。俳優。小学生の頃東京へ移転。中高生時代は立川に在住。1980 年、山口百恵さんとは結婚。その後国立市に居住。二人の息子さんの父。20 歳より芸能界でドラマ、映画などで大活躍。日本アカデミー賞、ブルーリボン賞など数々の映画賞の助演男優賞を獲得。

〈会長〉 三浦さん、本日は、お忙しい中、お話をする機会をいただきましたありがとうございます。
〈三浦〉 そうですね。もともと父親が山梨県で警察官だったんです。駐在さんだったもんですから、いろいろ赴任先が変わります。私がまだ小学校に入る前に、いろんな所に転校するのがかわいそう、というのが多分あったんだと思うんですよね。それで父が会社

〈会長〉 三浦さん、本日は、お忙しい中、お話をする機会をいただきましたありがとうございます。
〈三浦〉 はい、富士見通りの、山口ビルって言いましたかね。3 階か 4 階建ての小さなビルで、下に日立の電気屋さんが入っていたんですよ。昔まだ国立音大があったところで、そのすぐそばです。そのアパートには、音大生が何人か住んでいたと思いますね。そんなところに引っ越して。それは、家出なんですけどね。こんな近い所に家出してますけど…。
〈三浦〉 そうですね。そこから仕事を始めて、20 歳ぐらいから都内に出て行って。そこで

〈会長〉 三浦さん、本日は、お忙しい中、お話をする機会をいただきましたありがとうございます。
〈三浦〉 はい、富士見通りの、山口ビルって言いましたかね。3 階か 4 階建ての小さなビルで、下に日立の電気屋さんが入っていたんですよ。昔まだ国立音大があったところで、そのすぐそばです。そのアパートには、音大生が何人か住んでいたと思いますね。そんなところに引っ越して。それは、家出なんですけどね。こんな近い所に家出してますけど…。
〈三浦〉 そうですね。そこから仕事を始めて、20 歳ぐらいから都内に出て行って。そこで

〈会長〉当たり前になつてきちゃうんですよ。

〈三浦〉私は、富士山が大好きなんですけど。きつと、富士山の近くに住んでいる人はあまり感じなくなつてしまうと思うんです。それと同じで、たまに、桜の季節、若葉の季節、そういう時に感じるものというの、初めて国立に来られた方と同じような感想を持つかもしれないですね。ですから、あらためて、ああ、いい所に住んでいるなと思いますね。

〈会長〉お子さんたちは、時々帰つてくれますか？お二人おられますか？

〈三浦〉はい。子供たちは大学で寮生活だったんですよ。それでもう出て行っていますから。

もう15、6年になりますかね。長男が帰ってくるのは、2、3か月に1回くらいです。次男の方は、1年に1、2回位です。

自分のことを思うと、よく帰つて来るなと思いますね。私は、3年くらい帰らなかつたです。

〈会長〉そうですか。今、お父さんお母さんと一緒に住まいですよ。

〈三浦〉はい、そうです。

〈会長〉90歳を超えられておられますよね？

〈三浦〉母親が93歳、間もなく94歳ですね。父親は、1歳下なんです。二人とも国立の福祉の方にお世話になってますね。デイケアとか、訪問介護の人とかですね。そういう方に非常にお世話になってます。そういう部分では、国立は、すごくいいなと思いますね。本当に心から皆さん心配して下さつて。特に二人まとまつてるもんですから。

〈会長〉そうですね、大変ですよ、歳を取るとね。

この間、NHKのBS放送を観ていましたら、俳優の方ですけど、終末の介護の状況を自分の娘に撮らせるというドキュメントを放送していたんですが、なんとおっしゃる俳優さんでしたかね？

〈三浦〉織本順吉さんですかね。昨年亡くなられましたかね。

〈会長〉あつ、そうです、織本順吉さんです。

〈三浦〉数年前に共演をしたんですよ。物凄くお元気で。羨ましいくらいにセリフ覚えのいい方です。

〈会長〉なんか、セリフを覚えるのが得意と話されてましたね。

〈三浦〉織本さんは、凄かったです。年齢とともにですね、セリフ覚えが本当に時間がかかるようになるんです。自分で身をもつて感じているものですから。織本さんが80前後の時に、何回か共演をさせて頂いているんですが、共演したときにこんな風な俳優生活を送れたらいいなと、憧れの方だったんです。織本さんもやはりご自分でその限界みたいなことを感じてらしたのかかもしれないですね。ですから娘さんにそのドキュメントのようなものを記録として残したんだと思います。

〈会長〉最後に織本さんが、倉本聰さんの番組に出て、倉本さん、いや俺はもうだめだと思つたんだけれども話したら、倉本さんが、あなたの存在そのものがいいんだと、言われたと話していました。

〈三浦〉そうですね。本当に存在の素晴らしい方でした。

〈会長〉そうしたら、今、三浦さんのお両親はまだお二人とお元気でですか？

〈三浦〉はい。何とか。自分で歩いておトイレには行けます。そういった具合ですね。歳なの、その記憶のあいまいさとかも出てきましたね。ですからそういうことで、いろいろな方にお世話になつて

ます。

〈会長〉奥様も大変ですね？

〈三浦〉そうですね。一番迷惑をかけてると思います。私の両親ですからね。

〈会長〉お食事なんかどうされてるんですか？

〈三浦〉食事はですね。これは、親の元気なころからの意思で、週に3回くらいお弁当でも取ろうかという話になりました。夕食だけお世話になつてます。後は、作つたりしてます。

〈会長〉食べるという事はやっぱり大切ですね。

〈三浦〉そうですね。食欲は今のところあります。

三浦さんの趣味

〈会長〉次に趣味のことでお伺いしたいと思います。

趣味の陶芸はまだやられておりますか？やるきっかけは何だったんでしょうか？

〈三浦〉はい、しています。きっかけはですね。自宅に別棟を作つてそこに両親に来てもらつたんです。父親が70過ぎから一緒に住み始めました。父親は、本当に無趣味な人間で昔から、飲む、打つ、買う、一切無いんです。もう、何だろうというくらい、かたくな



〔陶芸のイメージ画像〕

な生き方をしている人なんです。友人関係も少ないです。そんな無趣味な父親ですので、いっしょに行こうかと言つて、けんぼう窯の陶芸に誘つたのがきっかけです。元からいた会員の方々は、ほとんどが女性です。その中に混じつて、二人ではじめたんですが、そうしたら私のほうが好きになつてしまつたんですね。自分の部屋にろくろを買い込んで、そして、電気釜も購入してみたことからどんどん発展して、職人さんを使わずに、自分たちで八ヶ岳の方に小屋を建てて、薪窯も作りました。ずっと友達と二人でやっていて、それが未だに続いています。

今、ちょうど朝ドラでやっているあの信楽焼です。全く同じ信楽焼をやつています。陶芸は、面白いですね。何故はまつたかな？というのを

よくよく考えますと、子供のころって、水遊びとか、火遊びとか大好きですよ。陶芸をやるといのは、結局そこなんです。あのろくろで回すときって、水引きつていつて、水なんですよ。そして、泥です。ね、ぐちゃぐちゃになつて物を作る。最終的には、薪窯で焼くんですが、それも火なんです。火を見てると落ち着きます。何とも言えない気持ちになりますね。

＜会長＞ 火というものは、そういう要素があるんですね。文明の一つの証ですね。

＜三浦＞ 川の流れたとかですね。そこに惹かれて今だにやつているんですね。

＜会長＞ 今回のくらの程度でやつていますか？

＜三浦＞ そうですね、はじめは、年に2回を目標にしていたんです。八ヶ岳には、窯がほかにも2つ3つあつて、そこに受け入れて頂いて、その方たちの窯も手伝ったりしながら年2回やつていました。八ヶ岳に窯を作ってから20年以上経ちますが、自分たちで始めて、最近、2年に1回位です。大変なんですよ、窯に行ったら草ぼうぼうですから。草刈りと薪割でほとんど時間がつぶされます。

＜会長＞ 薪の材料はどのようにして手に入れているんですか？

＜三浦＞ 薪はですね、親しくさせて頂いている建築屋さんが、本当に運よく造成をしたときに赤松を全部持つてきてくださるんです。本当に知り合いに恵まれています。その後は、チェーンソーで切つて薪を割るつていう作業をします。現実には、お金が物凄くかかるんです。本当は薪代だけで、1回燃すと100万円近くかかりますが、それが只でできるつていう幸運な場所です。

＜会長＞ そうですか。とても良い趣味をお持ちですね。

＜三浦＞ そうですね。私は、山梨県生まれなので、自然の中にいるのは、海よりも何か山の方に惹かれますね。海も好きですけど。

健康について

＜会長＞ 続いて健康管理についてお聞きしたいんですが、三浦さんは、ジョギングとか、何かされてますか？

＜三浦＞ さくら通り近辺を歩いていますね。第三公園のグラウンドもあり、ちょうどいいですからね。グラウンドで柔軟体操をして、少し速足で歩いています。近辺にジムもできたので一応会員になりました。

たが、でも今は、このコロナ騒ぎでジムが閉鎖となつてしましました。そのジムでは、筋肉にちよつと刺激を与えることをしに行つていただけで、若い人みたいに筋トレみたいな激しいことはやりませんけどね。

＜会長＞ 料理の腕前の方は、どうですか？

＜三浦＞ 私は、一人暮らしが長かつたので、一応の料理はできるんです。お勝手は手伝つたりしていますね。

＜会長＞ そうですか。今三浦さんは、68歳ですよ。まだ少し早いんですが、古希を迎えるにあたつて感じることはありますか？

60歳を迎えたときの考え方と現在との違いなどはどうですか？

＜三浦＞ はい。あと1年と数か月で古希を迎えます。60歳になつた時には、それまでの50歳を迎えた時までと印象が違ふと感じましたね。あと何年この俳優という仕事ができるのかなとか考えたり、これから先あと何年生きられるのかなとか、そういうことを真剣に考えるようになりましたね。70歳を迎えたらもっと考えるんでしょいうね。

＜会長＞ そうですね。今、私ど

ものシルバー人材センターも、550人近くの会員がいます。が、平均年齢が75歳なんですよ。だから、70歳なんてまだ若い！と。

＜三浦＞ そうですね。そういう風に考えられるといいですね。

＜会長＞ 世間でいう、70歳、75歳というのは、まだまだ現役で頑張れる世代だなど、ある意味、そういう世代となつてきましたね。

＜三浦＞ 人生100年！なんでしょうね。本当に親を見てみると、私は、長生きよりも元気にということ、そういうことが問題になっていると思います。長く生きてほしいのか、とちよつと感じています。その自分も歳をとつて、面倒を見てもらうようになり、息子にお嫁さんが来てくれれば、迷惑をかけてしまうのか、なというのをちよつと考えたりします。テレビなどで拝見すると100歳でお元気な方がいますよね。実はそれつて、すごい理想像ですよ。本当に元気でいい。人間ドック等の健康医療全部が進んだおかげで、長生きはするんですが、いろいろ辛いことが出てくるなど物凄く実感しています。いま親を見ているので特に感じます。ですから、自分の健康には、本当に気を付けようと思つています。

＜会長＞ 私どもの会員の中に90歳の方がおられるんですよ。やつぱり結構元気ですね。働いていることに、非常に楽しみを感じながらやつておられますからね。ほんとに人生100年、ということは間違いないだろうなと思いますね。

＜三浦＞ 幸運にも、私は、俳優という定年のない仕事です。で、本当に元気というか、体さえ動いて、それで、少し脳が働けば仕事を続けていけます。そして、依頼があればできる仕事なので、そういう意味では、恵まれているかもしれないですね。

シルバー人材センターについて

＜会長＞ ところで、三浦さんは、シルバー人材センターについてうのはご存じでしたか？

＜三浦＞ シルバー人材センターの名前だけは知っていました。この間頂いた小さな冊子で事業内容などを初めて知りました。

＜会長＞ まだ一般の市民の方に、シルバー人材センターの認知度は必ずしも高くはないと思います。私のシルバー人材センター会長としての Motto は、「センターの会員になつてただ働くだけではなく、会員同士がお互い会話をしながら、その会話の中から会員、

市民が楽しめる事を見つけないことができるシルバー人材センターにしよう！」ということです。それで、コミュニケーションの場を持つためにこのシルバーはうす105を設けました。

＜三浦＞ 会話、コミュニケーション、必要ですよ。

俳優のお仕事について

＜会長＞ 会話がないと、本当に面白くないですよ。会話が出来る環境をいかに作るかということが、我々の課題なんです。

ところで、三浦さん、ご自分の俳優人生を若い時から振り返って、いろんな人と巡り会っておられると思いますが、三浦さんが書かれた「被写体」という本とか、或いは、「相棒」という本を拝読しました。三浦さんは、大変な思いをしていたんだなと思いが、拝見しました。色んな時にいろんな人に巡り合っていますね。特に印象に残っていますか？人は、何人かおられますか？

＜三浦＞ はい。私が、この人に会わなかったらという人は、もちろん何人も何人もいます。監督でもいいっぱいいますし、この監督さんのおかげでというのがあります。あと共演者でも若いころにお世話になった方々ですね。最初に、デビューしたときの宇津井健さ

んですとか、しばらくしてからの池内淳子さん、森光子さん、志村喬さんです。私は、演劇青年でもなんでもなかったの、俳優という世界は、偶然入れた世界だったので詳しくなかったんです。今思うと、この方たちと一緒に仕事が出来たんだなって。もつともつとお話を聞いておくべきだったなという方が、本当にたくさんいます。

＜会長＞ 三浦さんが本の中で書かれておりましたが、相米監督さんとの出会いで、自分の俳優人生にのめりこむと言いますか、これに決めようといった様なお話が出てきます。相米さんは、亡くなられていますよね？

＜三浦＞ 52か53で亡くなっていますね。若かったです。

＜会長＞ その相米監督の「台風クラブ」という作品ですが、三浦さんは、数学の先生の役で出られておられますね。私は、実際の映画は見てないので、ユーチューブで拝見しますと、中国語で翻訳されているんですね。だからこの作品は、非常に話題作だったなという感じを、私は持っています。

＜三浦＞ 確か、この作品は、東京国際映画祭1回目の時にヤングシネマ賞みたいなものを

取っていると思います。

＜会長＞ この作品で真剣に俳優になろうと、気持ちも変わったのでしょうか？

＜三浦＞ そうですね。私が、32、33歳の時だったと思います。それまでは、年齢的に言う、20代の頃、20歳か21歳でデビューして、アイドル路線みたいな形の俳優生活をしていました。この作品で初めて、違った演出のされ方って、言いますか、違ったタイプの仕事が出来ました。

＜会長＞ 本の中で、映画は、演じるのではなくて、参加するんだと表現されておりましたよね。

＜三浦＞ そうですね。そういう意識も持っていたということなんですよ。もう当然頭では、分かっていることなんです。映画は、スタッフがいて、出演者がいて、総勢100人位の中で制作して、自分、全体の中の一人なんだということは、もちろん分かっているんです。作中の一人だということの再認識をしたんだでしょうね。出演者ってなんかちょっと違った扱い、特別扱いをされるところがあるんですね。私が20代の頃なんかは特にありましたね。そういう特別な扱いをされることとはなくて、その画の中の

一人なんだっていうことを再認識させてもらった監督だったですね。

＜会長＞ これも本の中に書かれていましたが、授業中に用務員が教室まで先生役の三浦さん呼びに来る台風クラブのワンシーンのリハーサルで、相米監督が、「さつきさ、呼ばれた時振り向いたじゃない。あの時さ、振り向き方がさ、三浦友和なんだよな」と、あれは非常に印象に残りましたね。

＜三浦＞ そうですね、三浦友和という偶像に無意識のうちに縛られていたんですね。それだけではなくて、自分では気づかない事もです。その象徴的な出来事だったんです。

＜会長＞ 相米監督は、自分で気付いてくれと。本人には、こうして欲しいって言わないで、自分で気付くのを待ってくれるような監督だったんですね。

＜三浦＞ そうですね。僕らも先輩の背中を見て学べ！というのと同じで、親の背中を見て育ちますしね。でも言葉で何か言われたことっていうのは、そんなに勿論ないですね。

＜会長＞ 言葉だと限定されてしまふんですね。

＜三浦＞ 本当に学んだということとは、その人を見て学ぶことです。その人を見て学ぶことですよ。

「その人に言われた事とか、何か印象的な言葉はないですか？」と聞かれることがありますが、そうではないんです。生き方、僕らで言うなら、仕事現場での居方、あり方ですね。そういう事がだんだん言われなくてもわかってくるんです。

＜会長＞ そうですね。台風クラブあたりの作品から役柄がガラッと変わって、いろいろな役で出ておられますよね。

私が印象に残った映画があるんですが、確か、「沈まぬ太陽」という映画に出ておられましたよね？渡辺 謙さん。その映画のJALの事故、確か、85年だったと思います。その時に亡くなられた歌手の……誰でしたかな？

＜三浦＞ 坂本 九さんでしょうか。

＜会長＞ そうでした。坂本 九さんでした。坂本 九さんと私、同い年なんですね。何か非常に、ある意味、親近感を持ちましてね。ああ、と思いました。

その時の三浦さんの役は、確か、あの渡辺 謙さんと対立する役でした。

＜三浦＞ そうです。敵役でした。



ね。

その役を引き受けたのも、やっぱこの人も時代の犠牲者なんだなと、ちよつと思っただけですね。

父親と重なる部分をそこで一番感じたんですよ。私の父親は、昭和2年生まれで、ぎりぎり戦争に行っていないんですが、そういう時代を知っている人間の、いろんなことを背負って生きてきた不器用な父親の姿がはつきり見えます。その世代ですよ、間違いない。ですから、人付き合いも下手です。もつと、もつと、勉強したかったかもしれない



のに、時代的には出来なかった。それで、警察官になつてみたのは良いけれども、転勤が多い。じゃあ、会社員になつてみようかと、ちょうど東京タワーができた頃、昭和35年くらいに、東京の新宿区に出た。父親が35歳のときです。35歳で学歴がないと、当時は、特にきつかった時代でした。大企業に勤めて、挫折するんです。学歴社会ですから。

〈会長〉そして、その後に「三丁目の夕日」という作品に出ていますね。三浦さんは、宅間先生というお医者さんの役でしたね。

この物語、下町の良き時代の一つのドラマでしたね。

〈三浦〉そうですね。宅間先生も戦争で妻と子供を亡くしている設定です。

本当に出番は、僅かですけど、この役も戦争というものを引きずっている人なんだなという面白さがありました。

僕は、団塊の世代からずっと含めてですが、戦争を知らないで育った世代です。娯楽要素が強い作品ばかりをやることが多いですが、戦争を知らない世代に向け、戦争というものを感ぜさせる作品も私はやりたいなと思っています。今年の1月に「風の電話」という映画が上映されました。この作品は、8年前の東日本

大震災で家族を失った少女の話です。出演料はいらない、そういう仕事でしたね。

震災で犠牲になった子どもが、親も、全部なくして、おばさんのいる広島に引き取られて、そして、その広島から震災以来一度も帰っていない。かつて故郷・大槌町へ向かうロードムービーです。その道中にいろいろ出会った人たちが、よって傷ついている女の子が光を取り戻していく話です。

私も少女が出会うその一人の役ですが、こういう作品に出るときは、気持ち全然違います。面白いものを作ろうではなく、人に感じてもらえるものを作る、それができればいいなという気持ちでしたね！

〈会長〉私も昭島で観ましたよ。

〈三浦〉どうでしたか、この映画は？

〈会長〉本当に良かったですね。諏訪監督の撮り方っていうのは独特なやり方だと感じましたね。

〈会長〉三浦さんは、今後どういう映画をやりたいと思えますか？

〈三浦〉そうですね、年齢的に言うと、自分のやりたいものを作る、特にそういう事を考えるようになりましたね。こ

れは、物凄く贅沢な話ですよ。年に半年は休む、ですね。

僕らの仕事って、今、働き方改革で少しは楽になりましたけど、朝から晩まで徹夜だったりとかって当り前の仕事なんです。ですから、半年働くと実は、8か月近くは働いている事になるんです。

本当に、年の半分くらいは休んで、自分の趣味のことも含めてですが、家族のこととか、そんなことを考えようと思っています。

後は、「風の電話」に象徴されるように、そういう映画にも出る必要があるし、やりたいなという気持ちが強くなっていますね。

〈会長〉私が観て大変ショックだったのは、「葛城事件」という映画作品で自分本位な性格の葛城 清の役をやっておられましたよね。

どういう気持ちでその役をやられていたのかなと思いますね。

〈三浦〉あれは、役に惚れてやっていますね。

〈会長〉現実にああいう方がおられますよね。

〈三浦〉そうですね、いますよね。身の回りにもあのタイプに出会うことが多いですから。だから、あまり苦労しなかつ

たですね、役づくりみたいなものには。こんな感じでできるかな、ここにもモデルがいる、ここにもモデルがいるみたいなですね。

でもその人って普段どんな生活で、どんなことを考えて、例えば家族構成とかですね。後は、どう生まれ育ってきたらこういう人になるんだろうとかですね、いろいろ考えさせられましたね。

〈会長〉あと、いろいろ本とか書かれていますから、何か本とか、脚本を書くとか、ということは考えていますか？

映画に参加する、いっしょに作るという気持ちで監督もしてみるとか？はどうでしょう。

〈三浦〉そうですね。脚本を書くとか、監督をするとかは、全く違った職種じゃないですが、監督が一番大変で、実は、やったら大変だろうと思っています。でも、やる機会は、きつとあると思うんです。

脚本は、劇団のものを今までも何回か書いたことがあります。ですから、どこにポジションを置くのかだけのことで、本当に同じ仕事の中の一つですね。

〈会長〉三浦さんは、まだ68歳ですからね。これから俳優をベースにして、まだまだ80過ぎるまで、或いは90まで続け



ていつてもらいたいですね。

＜三浦＞できたらいいですね。その年齢のきつと役回りについてのが必ずあるはずですからね。

＜会長＞今までにやっていない役についてのは、何かありますか？

＜三浦＞それは、もう数限りなくあると思います。

＜会長＞こんな性格の役とか、こんな役をやってみようかなとか、はありますか？

＜三浦＞俳優という仕事は、自分で選べる仕事ではないものですから。

さっきお話に出た相米監督のように、じゃあ「三浦」でやってみようかって言ってくれる人がいないと、僕は、成り立たないですからね。「こんな風な役を三浦に頼んだら面白いかもしれない」と思ってくれる人がいるように、今の仕事を頑張るしかありません。

ご家族について

＜会長＞事務局長ほか他に聞きたいことはありますか？

はい。事務局長の武川です。三浦さんの「被写体」という本を読んで感じたのですが、三浦さんは、子育てに関して、父親の思いとか、威厳とかを物凄く感じたのですが、子どもたちに対しての精神的な支えとか、言葉ではなく見せていたことってありましたか？

＜三浦＞見せるっていうか、そういうことを子供たちに感じてもらいたいなと。そういう生き方をしたいなと思っています。

子育ては、子供たちとずっと一緒にいるのは母親ですから、本当に妻の役割が大きいですね。

子供たちは、ある意味まともにも育ってくれてると思うので、妻に感謝ですね。

＜会長＞お子さんお二人のご結婚はそろそろでしょうか？

＜三浦＞そろそろ結婚してほしいですね。二人とも30半ばです。

でもこればかりは、いろんなご家庭もあるし、いろんな生き方もあるので、絶対に口は出さないとですね。

＜会長＞今の時代、30幾つになっても、男性も女性も親と住んでいる方も多いですね。

＜三浦＞そうですね。いろんな問題を抱えている家庭がありますよ。

それだって、原因は、分からないです。親はみなさん正しい子育てをしたのに、どうしてこうなったんだろうと思ってるんでしょうね。

自分の子供たちに関して、もう30いくつですけれども、これから何か問題が起きるかもしれないいつもそれは思っています。

自分自身もそうですが、年齢的に、親を見れば分かるように、いろいろ変わってくる訳ですね。自分も体のこととか精神的なことと変わるところもあるだろうと思っています。

あと、健康問題ですね。で

すから、そういうことはいつも不安を抱えています。30いくつになっても、いつまでも子どもは、子どもなんだなと思います。そんなふうにしては、いけないんですよ。うけれどもね。

＜会長＞はじめにもお話ししましたが、三浦さんは、結婚40年ということですね。指輪を作って奥様に贈られていますね？

＜三浦＞昨日そんな話が出たばかりなんです。

指輪はずっと作ってきましたが、今年、結婚40年ですけど、今の指輪は気に入っているしどうしようかなという話を昨日していたんですよ。

10周年のときは、ペアウォッチみたいにしたんです。ですから、そんなことでもいいのかなと思っています。でも、指輪がいいかもしれませんね、記念で。

＜会長＞ご結婚40周年も楽しみですね。

本当に今日は、長時間にわたり三浦友和さんからいろいろなお話を聞くことができました。大変ありがとうございました。

これからも大いなるご活躍を期待しております。ありがとうございます。

※この対談は令和2年3月25日に行われました。

あなたも入会してみませんか

■市内在住の60才以上の方で、健康で働く意欲のある方なら、どなたでも会員になることができます。

★毎月第3木曜日に行われる入会説明会にご参加下さい。月一回の入会説明会に参加できない方も、WEB上からすぐに仮入会ができます。

★くわしくは下記までお気軽にお問い合わせ下さい。

公益社団法人国立市シルバー人材センター ☎ 042-577-0919

会員募集集中

